

河川における自然再生の事例紹介

< 湿地の再生に関する国際的な取り組み >

湿地の保全に係わる国際的な条約として「ラムサール条約(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)」があります。その締結国会議における湿地の捉え方は、防災や水資源の管理・確保に役立っている湿地や、流域全体、また地域の気候に影響を及ぼす熱帯林や雲霧林などを含む、広義の湿地保全が意識されています。このように、ラムサール条約は、水鳥の生息地の保全から、湿地の生物多様性保全、さらには、「水」環境全体を保全の対象とした、より幅広いものとなってきています。森と川と海の水系全体を視野に入れ、水資源を自ら保全し管理できる能力を持つ湿地環境が、今後、条約登録の対象地として増えてくることとなります。さらに、水系・流域の保全・管理にあたっては、地域住民の参加が不可欠であるとしている点は、特に重要です。

- コスタリカのサンホセで開催された第7回ラムサール条約締約国会議より(1999) -

- 1、自然な水の流量を維持し、洪水などを防ぐ湿地環境
- 2、水をため、一定量を随時供給する湿地環境
- 3、地下水を涵養する湿地環境
- 4、カルスト地形、湧水、地下水など、地表を流れる水の供給源となる湿地環境
- 5、河川の流域全体を含む湿地環境
- 6、ツンドラ、砂漠、熱帯林など、各地域の気候に安定をもたらす湿地環境
- 7、高い水質の維持を可能にしている湿地環境< 湿地の保全、再生 >

- 世界の河川における自然再生の事例 - (リバーフロント整備センターホームページ)

ブレイゼ川(デンマーク)

ブレイゼ川は主に農業地域を流れる川で、1965年に流域での集約農業を推進するために直線化された。再蛇行化の目的として、農地から流出した栄養塩類を直接海域まで排出せず、氾濫原(牧草地)に蓄積させ、豊かな湿地環境を再生し、合わせ遊水機能を持たせている。(1987年~)

キシミー川(アメリカ)

南フロリダに位置するキシミー川はオケチョビー湖と合わせ出水時にエバーグレイズ湿原の水源として機能していたが、治水事業により川は直線化し、また河床の低下とともに氾濫頻度が低下し、エバーグレイズ湿原の乾燥化の一因となった。事業では、エバーグレイズ湿原の再生(エバーグレイズ総合再生計画 2000年)の一環として、再蛇行化により氾濫を助長させ湿地を再生することを目的としている。

ドナウ川(オーストリア)

ドナウ川に沿ったレーゲンスブルナー氾濫原において、氾濫原の再生と生物の生息地の回復川の河床低下を抑えて氾濫原に堆積した土砂を下流に供給するなどを目的とし、氾濫原に残る旧河道と本川をつなぐ工事やダム撤去を行っている。

結果、周辺に肥沃な氾濫原が再生すると同時に、本川の流速の減少、適度な流量を確保できるようになり船舶の安全な航行ができるようになった。(1995年~1999年)

- 日本における自然再生の事例 -

釧路川(釧路湿原): 北海道開発局ホームページ

釧路湿原における「釧路湿原の河川環境保全に関する提言」においての目標は、下記のようになっています。

「釧路湿原の河川環境保全の長期的な目標として、ラムサール条約登録(1980)当時の環境へ回復することが望ましい。そのためには、流域及び河川からの負荷を土地利用が急速に展開した以前の水準に戻す必要があると考えられる。

ただし、釧路湿原のハンノキ林面積や湿原面積などを指標とした環境については、現在も急速に変化し続けていることから、当面、20~30年以内に達成する目標として、西暦2000年現在の状況を維持・保全すべきである。この目標を達成するには、流域及び河川からの負荷を少なくとも概ね20年前の水準に戻すことが必要である。

流域住民、市民団体、民間企業、関係行政機関すべてが、釧路湿原を軸としてつながっているという認識のもと、交流・連携を深められる地域・社会づくりが重要と思われる。そのためには、釧路湿原の適切な保全と利用のルールやマナーの共通認識をもつことが当面の目標となろう。」



釧路湿原の保全: 釧路川茅沼地区復元予想図